珠玉の表現が 散りばめられている、素晴らしい内容！心が震えました。

Shining angel・緒方　紀子

札幌では、知る人ぞ知る 自然食の店「まほろば」主人、宮下周平 社長さんによる「倭詩」の 続編「續 倭 詩」。

素晴らしい内容で、一気に読破してしまいました。
二度・三度と読みたくなるご本と感じました。

宮下さんの体験に基づいた目線や思いを通して語られる古き良き時代の日本の美しさ…、日本人の心のあり方…、世界の中から眺める日本…、忘れてはいけない大切なこと…、自然との対峙…、などなど、、、そのどれもが心に響きました。推薦を書かれた 大貫妙子さんの 推薦の言葉「覚悟」にも深く感動。

日本の宝、偉大な数学者 岡潔先生に師事した事から始まり、霊水に込められた秘跡や哲学的なおはなし…。

どこから読んでも、感動の連続、間違いなしです！！

少々難しい、忘れてしまっているような古典的な語りや、言葉の表現の その先に 垣間見ることのできる古の刹那の瞬間 ……。

博学、博識 というものを超えた、今 再び 倭魂を受け継いだ 子孫として、思い出したい……、或いは、忘れてはいけない…、情緒 という言葉に顕わされる心の機微に想いを重ねる……、珠玉の表現が 散りばめられている、素晴らしい内容と 感じました。懐かしい未来 が、ここには 描かれて (書かれて) います。心が震えました。

感動致しました。ありがとうございます。
多くの方に お勧めしたい 宝物となる一冊です。

この一冊がエッセイを変えた！

酔　客

スティーヴン・グリーンブラットに倣って言えば『二〇一六年、この一冊がエッセイを変えた』と言えよう。新歴史主義ならぬ新随筆、新随想、つまりニューエッセイの金字塔である。昨年末、「2016 年に読んだ本のベスト 3 」を机の隅に積んでおいた。
① ジル・ドゥルーズ『ドゥルーズ　書簡とその他のテクスト』
②　角田忠信『日本語人の脳 : 理性・感性・情動、時間と大地の科学』
③　別所真紀子『詩あきんど 其角』
次点　ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』

①を手に取る読者はかなり限定されるだろうが、ガタリやフーコー宛の書簡はじつに興味深い。ある人は『アンチ・オイディプス』『千のプラトー』を書棚から抜き出すだろうし、私は『意味の論理学』とキャロルの数冊を再読した。その後、マーチン・ガードナー『ルイス・キャロル 遊びの宇宙』を探しているのだが、筐底から出てこない。

②は、かつて日本人の母音言語が左脳にあることを論じたもので、欧米の学者から反論され、毀誉褒貶、かなりの年月を経て、「日本語人」の特性をあぶり出したものだが、一般の人が読むのには難解である。編集と図解ということの重要性を感じるとともに、読者を納得させるむつかしさを痛感する。

③の評伝は、前年の読売文学賞受賞の余韻のなか、今泉準一の著作とは違った、いままで、なぜか書かれなかった晋其角を活写して、すこぶる読ませる。左党なら、冷えた純米吟醸を呑みながら、『五元集』通読の誘惑に駆られるかもしれない。

『サピエンス全史』は上巻だけ読了、下巻は正月の楽しみに残しておいたので未読。そのため、次点としてある。
2016 年のベスト本はこの 4 点 5 冊で終わりだな、そう思っていた 12 月末の新聞広告に掲載された一冊、それが宮下周平『續倭詩』。

「利休は隠れキリシタンだった！？」とある。
川上不白ファンの私としては大いに食指が動き、新知見ありやなし、と購入、一気に読了。愕然とした。
この書、上記ベスト 3 ＋次点をはるかに凌ぐ傑作であった。私が読んだのは今年の正月だから、正確には「2016 年刊行のベスト 1 」と註すべきかもしれない。

けっして、いまふうの柔らかい文体ではないが、何と理解しやすいのだろう。それにしても、おどろくべき達意の文章であり、そのうえ多くの写真・図版を用い、いかにして読者にこみいった内容を易しく伝えようという技術があり
ありと感

じられる。レイアウトなど、余程優秀なスタッフが周囲に居るようだ。
『千夜千冊』の流儀を、ふと感じてしまう。

『フランシス・ベーコン　感覚の論理学』アメリカ版の序文でドゥルーズは「ベーコンを引き付けるのは、肉体に対して作用する不可視の力なのだ」と書く。
『續倭詩』の宮下周平氏は衣食住を中心とした、身の回りのことから説き起こし、文学絵画音楽建築といった芸術へと飛翔し、東アジアの時空を超えて考察、普遍的な人間そのものの解釈と腑分けと可視化へと筆をすすめた。

氏は詩人であり発明家であり啓蒙家であり、医家であり実業家、そしてなによりも農の人である。パウル・ツェラン、『音、沈黙と測りあえるほどに』『古来風体抄』『万物の歴史』『パンセ』『安岡正篤墨跡集』『論語と算盤』などを並行して読んでいるような「読書の快楽」を覚えるのだ。

北の野に遺賢あり。日本論・日本人論の新しい地平を見せてくれた名著、ニューエッセイの誕生を喜びたい。
2017.2 月 13 日